

デーリー東北

2022年(令和5年)1月9日(月曜日) (21)

当たり前の自由奪われた10代後半

成長実感、悔しさも

20歳の思い

変容の先に コロナと社会

晴れの式典、収束願



晴れの式典に臨む磯嶋優真さん(上)、米田唯愛さん。成人式ではコロナ収束への願いも広がった。8日、八戸市公会堂



多感な10代の終わりに、新型コロナウイルスの直撃を受けた。感染症と向き合った3年間。そして「大人」になったが、多くは今も青春時代を過ごす。

成人年齢が18歳に引き下げられても、やはり20歳は大きな節目。成人の日を前に8日、全国各地で晴れの式典が開かれた。新型コロナウイルスの流行で学校生活は一変した。八戸市成人式の午前9時、市民会館を讀み上げたのは八戸工業大2年の磯嶋優真さん(19)。高校での悔しさを胸に、大学で野球に打ち込む。

熱は以前にも増して高まっていた。新たな仲間と白球を追いかけるのが楽しい。公務員という新たな目標もできた。「大変な思いをしたけれど、成長もできた」。コロナ禍での経験を今後に生かす考えた。橋本航成さん(20)は弁護士を目指す東北大の2年生。青森県立八戸高を卒業後、親元を離れた。入学当初と比べて厳戒態勢は緩和されたが、授業はいまだオンラインが多い。歓迎コンパや飲み会など、学内の伝統行事も断ち切られた。思い描いていたキャンパスライフとは程遠い。仙台での日々が少しさみしいのは、古里が遠くなるからだけではない。気付けば大学生活も折り返し。早く大学生らしい経験をしてみたいと願う。

「腹立たしいのに、目に見えないから、何に怒っていないのか分からない」。八戸高専5年の米田唯愛さん(20)はコロナ禍の心境を明かす。思うようにアルバイト

式典での「誓い」には、社会に貢献するため、さらなる成長を目指す決意を込めた。4月には岡山大へ編入する予定だ。「気兼ねなくマスクを外して、友人と顔を見せ合って話せるようになりたい」。コロナ禍での成人式、会場に広がった人の輪に、若者の思いが重なる。 (藤村大地)

※随時掲載

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。